

豊かな海と人々のかかわり

千賀康弘（東海大学海洋学部・学部長）

静岡市清水区にキャンパスを持つ東海大学海洋学部は、目の前に駿河湾が広がり、三保松原の先に富士山を臨む美しい風景の中にあります。このように恵まれた環境の中で学んでいる学生たちが、先生に連れられて東幡豆の海に来て、駿河湾にはない、人々の生活と密着した豊かな海を感じるようです。

この写真集は、昔から東幡豆の豊かな海が、漁業や養殖業、海運業などの産業とともに人々の暮らしを支え、時代の変化を受け入れながらもその豊かさを引き継いできたことや、豊かな海と人々とのかかわりなどについて教えてください。

個人的なことではありますが、私の生まれは幸田町です。祖母の実家は西浦で漁師をしていました。子どもころ（昭和30年代）、祖母の実家へ行くと、鍋いっぱいの茹でシャコが出てきました。実家には時々自転車の荷台にト口箱を積んだ魚屋さんが来て、その中には牛の舌（シタピラメ）が跳ねていました。春先には近所の人があさを獲ってきて、よくお裾分けしてもらいました。当時はそれが三河湾の豊かさだと気づきませんでした。

これから先も、より多くの人々に東幡豆（三河湾）の海を知っていただき、この美しく豊かな海をいつまでも大切にしていきたいと願います。

「地域の知」と「学術の知」をつなぐランドスケープ（写真）

エリアケイパビリティプロジェクト・リーダー
石川智士（総合地球環境学研究所・教授）

2008年に幡豆の地を初めて訪れた時、浜辺で遊ぶ子どもたちの姿と美しい三河湾に魅せられて以来、この土地に通い学術調査を行ってきた。その成果報告会には、毎年多くの住民の皆さんが参加してくださり、情報の共有と次の研究課題の設定にご協力いただいていた。このような交流を通じて、「昔は、前島でヒジギがとれた」とか、「以前はノリが良くとれた」など、昔の様子も知ることができた。皆さん、本当に良く昔のことを覚えておられ、また、それらの情報は学術的にもとても重要なものである。

現在の自然の様子や生き物の在り様を調べている我々の心の中に、どうやったら地域住民の方々との交流とその語りを通じて、幡豆の昔の様子を知ることができるだろうかという気持ちや、何とかして、昔と今を比較して、地域社会の自然と暮らしのダイナミクスを表現してみたいという思いが芽生えてきた。おそらくこれが今回の写真集の出発点であったと思う。

写真集を作るにあたっては、単なる記録としてではなく、自然や社会、暮らしの変化をとらえつつ、幡豆に残る幡豆らしさや豊かさを表現するものであってほしいと願った。今回、それぞれ異なる視点と経験を持つ3名の女性が、共通に感じる豊かさと価値は、きっと普遍的な、また、だれもが共感できるランドスケープを私たちに届けてくれていると感じている。この写真集が、時代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、様々な人の共感をはぐくむ種となってくれることを期待したい。

インタビュー：

「ふるさと」の未来のために

石川金男（東幡豆漁業協同組合・組合長）

●この写真集を見ていかがでしょうか？

まず感じたのは、昔の写真がよくここまで残っていたなあということです。つまり、当時、趣味として写真を撮る人がいたということですね。そういう人々のおかげで東幡豆の昔を知ることができる。思い出話的に見てもおもしろいですね。こう見ていくとやはり東幡豆の発展は幡豆石から始まったなと感じますね。

私は現在、環境教育など様々な活動をしています。やるのは大変だけれど、自分はよしとしてやっているのです。でも人に「やれ」とはいえない。ある意味趣味だからできるんです。写真と一緒にですね。思いが大事というか。この写真集を見ながらそんなことを思いました。

●未来に残していきたい東幡豆のよさはどこでしょうか？

それはやはり自然でしょう。東幡豆には自然しかありませんから。それに人間は自然に生かされていますからね。自然のなかでもとりわけ海の身近さは東幡豆ならではの気がします。

残念ながら、この地域の子どもたちは、生まれ育った場所の自然についてよく知りません。それに今の時代、海は遊ぶところというより、危険なところという認識のほうが強いのです。こうした意識を変えていかないとね。子どもたちには、自分の「ふるさと」に誇りを持ってもらいたいです。

そのためには、私たち大人が自然に恵まれたこの地域のよさを彼らに教えていく必要がある。個人や小さな組織の活動だけでは限界がありますから、様々な機関や人々が連携し、地域の発展も見据えて協働していくことが大切だと思っています。